

JISS

2013



[特集]
座談会：ロンドン2012におけるサポートの効果

[特集]
マルチサポート事業が果たした役割

ロンドンオリンピックの日本選手団戦績を振り返る

金メダル獲得5位以上ならず反省も
入賞種目数最多で将来に明るい兆し

2011年8月のスポーツ基本法、2012年3月のスポーツ基本計画を受けた最初のオリンピックである、第30回オリンピック競技大会（ロンドン）において、日本代表選手団は金7つを含む38個のメダルを獲得した。38個のメダル獲得は過去最多であり、また大会初日から途切れなくメダル獲得が続いたことも相まって、日本国内は日本選手の活躍に大いに湧いた。

しかし、スポーツ基本計画には政策目標として「オリンピック競技大会の金メダル獲得ランキングについては、夏季大会では5位以上」とある。今大会における金メダル獲得ランキングは11位と、5位を大きく下回ってしまったことは大いに反省すべき点である。

金メダルランキング上位国は金メダル獲得が大いに期待される競技を多く抱えている。2000年に開催されたシドニーオリンピック以降4大会連続で金メダルを獲得している競技は、日本では柔道だけである。一方、今大会で金メダル獲得ランキング1位となった米国は6競技、2位の中国は7競技、3位の英国は4競技、4位のロシアは5競技において、4大会連続金メダルを獲得している。我が国の「柔道頼み」の構造は明らかである。この改善が金メダル獲得ランキング5位以内を目指す上で必要となる。また、4大会連続でメダルを獲得した

競技においても、米国12、中国12、英国7、ロシア11に対して日本は4と、メダル獲得基盤についても脆弱であることが示唆される。メダル獲得有望競技が増えなければ、金メダル獲得有望競技も増えないことはいうまでもない。

とはいえ、今大会の成績は今後に向けて明るい兆しが見えたともいえる。

今大会におけるメダル獲得競技は13競技と過去最多であった。卓球、バドミントンでの初のメダル獲得に加え、メキシコ以来のサッカー、ボクシング、ロサンゼルス以来のウエイトリフティング、バレーボールなど「何十年ぶり」、という競技も数多く見られた。メダル獲得競技13はロンドンオリンピック参加国中6番目の数字であり、金メダル獲得ランキング5位を目指す国として、その順位に相当するメダルの数、メダル獲得競技の数であったといえる。

8位以内に入賞した種目数が過去最多であったことも心強い。今後、今回メダル獲得に成功した競技が連続してメダルを獲得すること、またメダルにあと一步であった競技がメダル獲得競技の仲間入りをするのが期待される。そして、この中から連続して金メダルを獲得し、お家芸と呼ばれる競技が増えることが政策目標達成の鍵となる。
(東京Jプロジェクト2012(ロンドン)報告書より)

	2000年シドニー大会	2004年アテネ大会	2008年北京大会	2012年ロンドン大会
金メダル獲得競技	2競技 陸上競技 柔道	5競技 陸上競技 水泳 体操 レスリング 柔道	4競技 水泳 レスリング 柔道 ソフトボール	4競技 体操 レスリング 柔道 ボクシング
メダル獲得競技	4競技 水泳 レスリング テコンドー ソフトボール	5競技 セーリング 自転車 ソフトボール 野球	4競技 陸上競技 体操 自転車 フェンシング	9競技 陸上競技 水泳 サッカー バレーボール ウエイトリフティング 卓球 フェンシング バドミントン アーチェリー

マルチサポート事業が果たした役割

2012年7月27日から8月12日まで開催されたロンドンオリンピックにおいて、日本代表選手団は史上最多となる38個のメダルを獲得した。その背景にあった、チーム「ニッポン」マルチサポート事業の内容と効果、そして今後への課題について、独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）情報・国際部の和久貴洋課長とマルチサポート事業契約職員の高谷高広氏に聞いた。

メダル獲得の確率を高めたマルチサポート事業

和久貴洋（JSC情報・国際部課長）

世界のエリートスポーツ選手への取り組みは、①競技力向上を統括するリーダーシップのもと、②強化を図るスポーツを重点化し、③競技力向上のための諸プログラムをナショナルレベルで展開する一が基本です。このうちプログラム展開については、拠点設置、タレント発掘・育成、エリートコーチング、アスリートのフルタイム化のための体制整備、スポーツ医・科学サービス、マテリアル開発、国際大会の招致・開催という7つがあります。我が国でも同様の取り組みが進められてきましたが、選手村の村外サポート拠点やマテリアル開発の部分は少し手薄になっていました。こうした現状を踏まえ、トップアスリートをもっと戦略的にサポートし、確実にメダルを獲得できるようにしようと考えたのが、マルチサポート事業の始まりです。

2007年、文部科学副大臣「スポーツ振興に関する懇談会」報告書では、オーストラリアが北京オリンピックの自転車競技でメダルを獲得するためにレースコースのデータを徹底収集し、本番を想定しパフォーマンスが最大となるペース配分を選手一人ひとりに割り出すという事例が紹介されました。いまや、コーチ、科学者、メカニック、映像などの様々なスタッフが一つのチームとして動かなければオリンピックで勝つのは難しく、このようなトータルな取り組みを実現しようというのが当時のマルチサポートのコンセプトでした。

マルチサポート事業 平成24年度ターゲット競技種目（夏季）

競技種目	対象
ターゲットA	
陸上競技／フィールド	男子
水泳（競泳）	男女
サッカー	女子
体操（体操競技）	男子
レスリング	男女
セーリング／470級	男女
柔道	男女
射撃（ライフル射撃）／ピストル	男子
ターゲットB	
陸上競技／トラック	男子
陸上競技／トラック	女子
陸上競技／フィールド	男子
水泳（シンクロ）	女子
テニス／ダブルス	女子
バレーボール（バレーボール）	女子
体操（体操競技）	女子
体操（新体操）／団体	女子
体操（トランポリン）	男子
自転車／トラック	男女
卓球	男女
フェンシング／フルーレ	男子
カヌー	女子
アーチェリー	男女
バドミントン	男女
トライアスロン	女子
ライフル射撃（ピストル）	女子

3億円から拡大し、2012年には27億円と大幅に増え、これに伴いサポート範囲も拡大し、全体としてはいい方向に行ったと思います。

結果的にロンドンオリンピックでは史上最多のメダルを獲得し、全38個のうち35個がマルチサポートの対象競技でした。従来からのメダル競技が継続してメダルを確保し、卓球、バドミントン、女子サッカーのよう新たな種目もメダルを手にしたことは前向きなポイントといえます。一方、JSC情報研究課が行った、メダル獲得の潜在力を有するアスリートが実際にメダルを獲得する成功率の分析では、北京オリンピックでの成功率は48%であったのに対し、ロンドンオリンピックでは63%と向上していました。ロンドンオリンピックは、「メダルを獲得できる潜在力あるアスリートがしっかりメダルを獲得した大会」ということができます。この事業によって、文部科学省、JSC、味の素ナショナルトレーニングセンター（味の素）、JISS、大学、民間企業が連携を取り、共通の目標のもとで事業を展開できたことも一つの収穫です。さらに、各NFが強化戦略プランを策定し、その中で現地の調整、拠点のあり方を戦略的に考えることができたのも大きい。成果は少なくないと思えます。

金メダルを4つ獲得したレスリングでも、オリンピック本番前の減量から体重を戻すリファイディングが非常にうまくいったと聞いています。リファイディングについては、どのような方法がそのアスリートに最も効果的かを日常のアスリート支援の中で研究・確立したうえで、マルチサポート・ハウスでも実施できました。「最後にハウスできちんと管理された食事を摂れたからこそ戦えた」と、あるアスリートが語

っていたそうです。ロンドンオリンピック後に設置された文部科学省検証チームにおける検討の中で、「マルチサポート事業は非常に良かった」という声が多く聞かれました。

このように、マルチサポート事業は有益な事業であるからこそ、これを安定化させ持続性を保つことが今後の課題です。また、現場でのサポート活動、マルチサポート・ハウス、研究開発もあらゆる面で常に進化していかないと世界の動きに追いつけない。たゆまぬ努力が求められます。2014年のソチオリンピックに向けてはフルタイムの専任スタッフが活動していますが、リオデジャネイロオリンピックに向けての動きはこれから。ロンドンオリンピックまで携わっていたいたサポートスタッフの継続性については各NFが深く懸念しているところですが、これは社会システムとも関わる問題。ターゲット種目の見直しや予算配分の変更、スタッフのさらなる充実を図っていく必要があると強く感じています。

シンガポールは、競技力向上の予算システムを4年間の制度に変更しています。世界の国々が長期ビジョンを持ってサポート体制の充実を進める中、日本も既存の仕組みに目を向けていかないと立ち遅れが出かねない。国としてのメダル獲得への取り組みがよりスムーズになるとともに、スポーツ界もまたクオリティの高い競技力向上事業を展開できるよう、認識を深めることが重要だと思えます。

JISS同様の環境を提供したマルチサポート・ハウス

四谷高広（マルチサポート事業契約職員）

スポーツ界にとって最重要イベントはオリンピック。この大舞台で選手たちに普段通りのサポートを提供したいと、ロンドンに設置したのがマルチサポート・ハウスです。

選手村では、食事もケアも日本にいる時と全く同じというわけにはいかない。ADカードがなくて選手村に入れないスタッフが数百人もいる現状もあって、村外拠点の必要性を強く認識していました。そこで、選手村に近いストラトフォードサーカスにハウスを設置し、しっかりとしたりリカバリーやコンディショニングを行ったうえで、ベストパフォーマンスを発揮できる体制を整えました。

この事業は2008年から準備を始め、2010年の広州アジア大会でトライアル

を行いました。ですが、広州では選手村からバスで20分も離れた場所にしかハウスを設置できず、利用者からは「使い勝手をもっと向上させてほしい」といった意見が寄せられました。その一方で、「オリンピックという注目度が高い中で、さらに高いセキュリティが必要だ」という声もありました。これを踏まえてロンドンオリンピックではどうかを検討した結果、選手村から徒歩10分にある好立地の劇場を丸ごと借りるという判断になりました。利便性の高さが幸いし、7月16日から8月12日までの28日間の開設期間中、延べ4217人、1日平均150人・最高293人の選手に利用していただきました。利用団体は21競技に及び、競技ごとに平均12・5回は使った計算になります。

今回、我々が特に重視したのが「リカバリー」という意識でした。トレーニングや競技自体のレベルの向上に伴い、リカバリーの重要度は一段と高まっています。競技によつてはオリンピック直前まで予選を実施し、そのままロンドン入りするケースもあり、選手たちをいかに早く本来の状態に戻すかというのは最優先課題だったと思います。

そこで、マルチサポート・ハウスでは、リカバリーミールやリカバリーボックス（持ち出し用の補食）、診療、コンディショニングやトレーニング、メディカル、メンタル面のサポート、映像分析、ハイパ

フォーマンストレーニング用設備などを用意して、複合的な形でリカバリーを促しました。プールも味の素の地下にあるジャグジーおよび炭酸泉と同様のものを設置し、日本と同じ交浴のケアが可能な配慮も施しましたし、リラクゼーションスペースに畳を敷いて「普段通りの雰囲気」を作るようにも心がけました。

選手村から「選手村から近くてよかった」、「JISSにいるようで、非常に使いやすいかった」、「日本食や炭酸泉の活用でうまくコンディショニングを整えられた」などという前向きな声が多く寄せられました。過去のオリンピックでは「調整不足でした」という反省のコメントをしばしば耳にしましたが、ロンドンではそういう話は皆無に近かった。大ケガをする選手が出なかつたのも、リカバリーの意識が高まった効果でしょう。マルチサポート・ハウスで継続的かつ多角的なサポートができたからこそ、過去最高の38個のメダルを獲得できた。そういう力強い手ごたえを感じています。

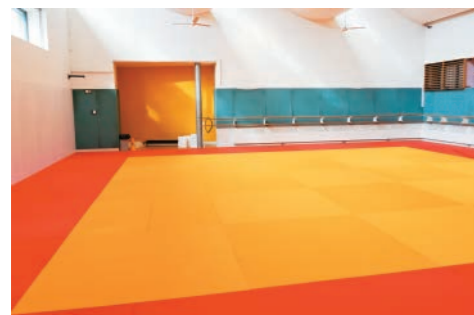
JISSができる以前は、オリンピック選手村に入って海外の有名選手などを見た途端、「オリンピックに来たんだ」と過緊張になり、失敗するケースも多かったと言いますが、今はJISSや味の素の横のつながりができていますので、それをそのままロンドンに持ち込めたのも大きかったです。選手同士、指導者同士の交流も可能でしたし、お互いに刺激を受けながら試合への準備ができたと思います。これもマルチサポート・ハウスの大きな効果だったのでないでしょうか。

ロンドンオリンピックではアメリカ、オーストラリア、シンガポールなど8カ国



が村外拠点を設け、サポート体制を強化する動きが加速しています。スポーツ先進国のアメリカは2000年シドニーオリンピックからいち早く着手し、4年後のリオデジャネイロオリンピックに向けても、体育館やプールなど総合スポーツ施設や学生寮が併設されているサッカークラブをすでに仮押さえしている状況です。リオデジャネイロはハウスに適した施設の数が少ないので、本番が近づけば近づくほど競争は厳しくなります。日本とは季節が逆ですし、治安やアクセスの問題もあって難しい部分もありますが、できるだけ早く動き出すべきでしょう。2014年のソチでも何らかの施設を用意する必要があると思います。冬の場合はスキーとスケートの場所が分かれていますので、1カ所なのか複数カ所なのかは現在検討中です。

今後はロンドンオリンピックで獲得したメダルの色をランクアップさせ、金メダルの数を確実に増やすための「日本独自の秘密兵器」導入も模索したいと考えています。そのための機器開発にも取り組まないといけないですし、JISSにおいて2013年4月より稼働予定となっているハイパフォーマンスセンターの設備を持ち込むことも重要テーマと言えるでしょう。我々科学者は、つねにクリエイティブであるべきと考えますので、既成概念を打ち破るようなマルチサポート・ハウスを作り、スポーツ界に刺激をもたらせればと思っています。



トレーニングホール



リカバリーミールホール



リカバリー・コンディショニングホール

マルチサポート・ハウスのサポート・サービス

【コンセプト】情報戦略・医・科学サポートの「ワンストップショップ」

カテゴリ	サポート・サービス
リカバリー・コンディショニング	リカバリーミール
	リカバリーボックス（持ち出し用補食）
	メディカルケアサポート
	トレーニングサポート
コミュニケーション	心理サポート
	コンセントレーションサポート
	コミュニケーションスペース
リラクゼーション・リフレッシュ	リラクゼーション・リフレッシュスペース
	高気圧カプセル
分析	分析サポート
	映像フィードバックサポート
情報戦略	選手村内との連携
	日本国内との連携

【座談会】 ロンドン2012におけるサポートの効果

ロンドンオリンピックでは13競技38種目がメダルを獲得した。その中で、11個を確保した競泳、団体で初メダルのフェンシング、史上初のメダルを獲得したバドミントンの各コーチを迎え、ロンドンオリンピックに向けたマルチサポート事業によるサポートの内容や効果について聞いた。サポートが競技力向上に結び付いた事実とともに、早くも次期オリンピックを見据え、さらなる要望や改善点についても意見が交わされた。

〈出席者〉

平井 伯昌氏
(競泳日本代表ヘッドコーチ)

江村 宏二氏
(フェンシングナショナルコーチ)

舛田 圭太氏
(バドミントン専任コーチディレクター)

白井 克佳
(国立スポーツ科学センター
スポーツ科学研究部前任研究員)



左から白井研究員、平井氏、江村氏、舛田氏

それぞれの目標と評価、反省点

白井 ロンドンオリンピックが終わって早いもので3カ月以上が経ちましたが、まず今大会の結果についてのコメントをいただきますか。

平井 競泳はオリンピック前、金メダルを何個獲れるか、が最大の関心事でした。結果的に金メダルはなかったものの、戦後最多の11個のメダルを獲得した。私たちとしては「何で金が獲れないのか」という反省もあったのですが、帰国してみると「競泳はチームワークの勝利」と絶賛されていて驚きました。内部と外部の評価の差が非常に大きかったですね。

江村 フェンシングも団体戦の銀メダル、それも進決勝のドイツ戦を残り数秒で勝って決勝進出したことで、いい評価を受けました。が、私たちの当初の目標はやはり金メダル。太田雄貴が北京で銀を獲得したので、今回は金しかなかったし、加えて団体戦でも金メダルを狙っていくつもりでした。決勝で戦った強豪・イタリアをあそこまで苦戦させたのは日本だけで、健闘したとは思いますが、悔しい気持ちも強いです。

舛田 水泳やフェンシングと違って、我々はまずメダル獲得が最大の目標でした。北京の後から「メダルを獲得する競技団体の仲間入りをしよう」という雰囲気は強かった。いろんなことがありましたが、結果として藤井瑞希・垣岩令佳が女子ダブルスで銀を獲得し、バドミントンとして悲願のメダル獲得を達成できた。男子シングルの佐々木翔も5位入賞し、世界無敵と言われた選手をあと一歩まで追い込んだ。全種目を通して、次のリオデジャネイロでもメダルを取ります。

江村 私もそう思います。国際大会に行くこと、他の国は必ずドクターが帯同しています。やはりケガはつきものですね。

平井 それと、サポートスタッフの専門性ですね。味の素ナショナルトレーニングセンター(味トレ)が整備され、多くの競技団体が使うようになるかと思っています。

舛田 専門性は重要だと思います。バドミントンの場合、団体戦や個人戦の大事な大会にサポートスタッフと一緒に行ってもらうとすると「別のサポートもあるので試合前の準備期間はいられます」と言われることがある。マルチの方で穴埋めをお願いしても「違う競技があるのが難しい」と言われるとどうしようもありません。

白井 トレーナー関係にしても、マルチサポートのおかげでもともといた1人を連れていけるようになったのですが、拘束時間が長くなると自分の治療院の仕事に支障が出ますよね。その代役を自分で探そうとすると「2週間は無理です」と断られてしまいがちで、その都度、違ったトレーナーに来てもらう状態です。引き継ぎという部分でも難しさはあります。可能であれば、JISSやマルチサポートで優れたトレーナーを常駐させて、遠征の予定によって、今回はバドミントンに行く、次回は水泳に

ルを狙える手ごたえをつかめたオリンピックでした。

大きかった4年間でのサポート

白井 2001年からJISSができて各競技団体へのサポートが始まり、2009年にはマルチサポート事業も発足。今回のロンドンでは現体制での初のオリンピックとなったわけですが、4年間のサポートのメリットをどう感じましたか。

江村 人が増えたことが大きいと思います。フェンシングチームの場合、協会のスタッフ、コーチ、マネージャー、総務がいきましたが、それに加えて映像撮影や栄養管理、メンタル指導をしてくれたりするスタッフが増えたことで、チーム力が上がったと感じました。

舛田 バドミントンもスタッフ数が少なくて、できることが相当限られていたのですが、今は主要大会のほぼ全試合の映像が撮れていて非常に役に立っています。これらの映像をもとにしたゲーム分析に関しても、こちらが要望した通りバドミントン出身の方が分析スタッフとして加わってくれましたので、話が早かったです。

白井 トレーナーについては、協会負担では大会に1人連れて行くのが精一杯で、選手30人を見るのは不可能だったのですが、マルチサポートのおかげで2~3人増やせました。栄養や心理的なサポートも大きなプラスでした。佐々木は2011年まで世界ランキング32位だったのに、1年間で6位まで上がった。これは男子シングルス史上初です。

これらのサポートを通して、選手のパフォーマンスも上がったと思います。



白井克佳 (JISSスポーツ科学研究部前任研究員)

平井 水泳は2001年からサポートを受けていて、当時は北島康介の強化を中心にJISSの機能を使わせてもらっていました。2009年にマルチサポートが導入された時は、それをより広くやるうとしたんです。

我々がまず要望したのは「こちらの推薦するスタッフを入れてほしい」ということ。期限付き雇用でJISSを離れた経験者の高いサポートスタッフを再び呼べたりしたのは、非常に大きかったです。競泳には今、ジュニアを除くと強化対象が60人くらいいる。そこで「オリンピック候補選手」というのを作り、国際大会の決勝に残って標準記録を切った者から優先的にサポートすることにしました。そういう幅が広がったのはよかったですね。

白井 サポートの幅が広がった分、それはどう生かすかという新たな課題も浮上しました。マルチサポートのスタッフについてはどう評価されますか。

平井 マルチサポートのスタッフもいいのですが、JISSに常時いる人が安心という気持ちもある。実際、水泳にも2003年からつけてもらっているJISSの研究員の方がいます。「JISSは研究、マルチは現場」と明確に線引きしない方がいいと思います。サポートは人間関係がものすごく大事。今回のオリンピックも長い時間をかけて良好な関係を作り、洗練されたチームでのぞめたことが大きかったですから。

私 が特に強く思うのは「JISS+マルチサポートの重要性」ですね。JISSができたことでトレーニングは確実に進歩しています。10年前には、海外遠征に行くのが僕らがアメリカやオーストラリアの選手の陸上トレーニングを盗み撮りして帰ってくるのが普通だったのに、最近はカナダやヨーロッパが日本の練習を学ぼうとする。JISSとマルチサポートの両方のスタッフがいるからこそ、それだけ進歩したので

さらなるスタッフ体制の充実

さらなるスタッフ体制の充実

白井 世界のスポーツ強豪国では、サポートにしても、医科学センターにしても、フルタイム化しています。日本ではマルチサポートができたことで競技力向上につながった部分は確かにありますが、まだ足りない部分もあると思います。

平井 マルチサポートの一番の欠点は、ドクターの部分です。海外の合宿に20~30人で行く時、ドクターが帯同していないのは日本だけ。そこは10年間変わっていないので

さらなるスタッフ体制の充実

さらなるスタッフ体制の充実

さらなるスタッフ体制の充実

さらなるスタッフ体制の充実

一極集中の功罪

平井 拠点がJISS1カ所に集中してい



江村宏二氏 (フェンシングナショナルコーチ)

ることも気になります。競泳では「大阪にJISSを作してほしい」という要望をよく聞きます。私たちにとって、一番欲しいのは「人」。全国の公立のスポーツセンターを「ミニJISS」にしたり、大学などをNTC化してくれば、強化普及にもいいと思います。

舛田 バドミントンも所属チームが熊本や大阪、富山にあるのに、東京のチームだけがサポートを受けやすい環境にある。有力選手も東京のチームを選ぶ傾向が強まってきました。バドミントンは47都道府県にジュニアが全て行きわたっているのですが、強化となると東京に集まってくるしかない。拠点を東西に1カ所、あるいは各地区に作るのか、そうなればいいという話はいくつもあります。

江村 フェンシングの場合も拠点がこしかないので、東京にしなければ強くなれない、日本代表になれないという問題があります。東西に拠点があれば、まんべんなくいい選手を拾いやすくなるのですが…。

平井 山口観弘という、今年(2012年)の国体で平泳ぎの世界新記録を出した鹿児島の高橋生を2011年10月から預かったんですが、彼のようにいい素材は全国にいるし、JISSに連れてきてサポートしたら強くなる。でも、結果として地方は、ベンベン草も生えなくなる“のではないか”という危惧がありますよね。アメリカなどは大学が拠点になっているので、日本もそういう形で地方を何とかできないかなと思います。

白井 その反面、JISSにあらゆる種目が集中しているメリットもあるのではないのでしょうか。

平井 それもあります。私たちがJISS



舛田圭太氏(バドミントン専任コーチディレクター)

でトレーニングすると、いろんな種目の選手と顔を合わせますよね。それで親近感を覚えたのか、ロンドンの選手村では水泳の選手が他競技の選手を応援していました。指導者の方も会場であつと「そちらはどうですか?」という会話が自然に出てくる。そういう交流が進んだのはいいことですね。

舛田 私もコーチになって4年経ちますが、いろんな競技のコーチの話を聞いていて、バドミントンが遅れているところや改善すべきところが分かってきました。競技団体単独で活動していたら、そうはいかなかったと思います。マルチサポートのスタッフ同士も話をしているので、「別の競技団体はこういう分析をやっています」という情報も入ってきます。

平井 チームジャパンとして、こういう拠点があるのはやりやすいですね。

舛田 ただ、JISSもこのまま行くとスタッフの取り合いになりかねませんね。

平井 確かに今が一番バランスがいい感じ

がします。これはあくまで個人的な要望なのですが、現在JISSの4階にあるようなトレーニングルームが各階に設けられると理想です。フランスのフォントロムヘ行つたことがあるのですが、トレーニングルームが3つあつて、ここはウエイトリフティングが使うところ、こちらはレスリングや格闘技が使うところ…と多彩になっている。現在のJISSも、もう少し機能性や専門性があるといいですね。

白井 JISSもマルチサポートも、もう少しかゆいところに手が届くサポート体制になればいいですね。

競技団体側の進歩も必要

平井 水泳で言えば、サポート体制はほぼ確立したかと思えます。それをどう吸収するかの段階に入つていっていると思います。サポートスタッフが、コーチをサポートするのか、選手にダイレクトに行くのかは難しいところですね。

ミールのおにぎりを持ち出して、バスの中で食べられるのは本当に助かりました。ADカードも4枚しかなく、選手村ではせいぜい1人か2人しかケアできない。マルチサポート・ハウスでもケアできるのは非常に良かったです。佐々木などはオリンピック前から練習後にメンタルトレーニングをしていたのですが、それをここでもできたのは大きかったと思います。ただ、途中で選手村を出る必要があり、その後は全く使えなくなりました。それからは、JSCロンドン事務所に弁当の配達をお願いしたのですが、費用は協会が負担しました。村外になってしまふ競技に対して、マルチサポート・ハウスの機能をどう生かせるかを考えていただきたいと痛感しました。

江村 我々は、マルチサポート・ハウスがなければ困ります。ケガをしている選手が多かったのも、いつもの人にも通りの治療してもらふ必要があつた。あれがなければ戦えなかったです。

平井 今回は競技施設も選手村もコンパクトで、マルチサポート・ハウスも近くてよかったですけれど、北京のような感じだと難しい。私たちはアテネの時、プールの真裏にマンションを借りて、そこで何か食べべから選手村に30分かけて戻ったりしていました。でも、そういうことを独自でできない競技団体もたくさんある。今回はすごくよかったし、今後さらに期待したいですね。

リオに向け継続性が課題

白井 最後に、4年後のリオデジャネイロオリンピックに向けて、よりよくしたい部

舛田 我々の場合、最初はコーチへのサポートを増やし、全体の理解を深めようとしたのですが、選手ダイレクトに行く例がかなり増えてきました。それはメリットもありますが、コーチが学ぶところももう少し欲しいですね。人間関係なので、選手がコーチに話せないことをスタッフに話したりするのはいい部分もあるでしょうが、コーチと選手の距離、選手とスタッフの距離を同じくらいに置いた方がいいというのが私の考えです。

平井 指導者の考え方が次第で、選手にサポートスタッフの意見が届かなかつたりする。「泳ぎをこう直したらいい」とか「スタートのやり方を変えた方がいい」という意見を選手は欲しているのに、サポートスタッフの意見をコーチが受け入れないことでもあります。時にサポートスタッフは指導者よりも内側に入らないといけない場合もあると、私は思います。選手には個性がありますし、指導者1人で見るとスタッフ3人で見るとでは、後者の方が正しい場合も多い。そういう意義を若いコーチに教育していくのが、次の課題なのかなとも感じますね。

江村 我々の情報スタッフはフェンシングのことを全く知らずに撮影し、それを見ながら「大田選手は下がった時ばかりやられていきますよ」と私たちも気づかないことを指摘してくれたことがあつたんです。むしろ競技経験のない人の方が見えることもあるんですよ。

舛田 我々の分析スタッフもそうでした。バドミントンの経験も少しはあるようですが、僕らが見ているのは違う感覚で映像を見てくれる。「え、そうなんだ」と思うことは結構ありました。これからも今ま

分をそれぞれお願いします。
江村 一番大切なのは「人」です。先ほども言いましたが、今まで継続してやってきたものをゼロにするのは非常にロスが大きいです。いいスタッフは残してほしいし、人も増やしてほしいですね。ロンドンでも現地にいるスタッフももう少しほしかった。ドクターの問題も含めて充実していただきたいです。
舛田 マルチサポートのおかげでこれまでのスタッフと強い信頼関係ができていて、その方たちにリオデジャネイロまで継続してサポートしてほしいです。
マルチサポート・ハウスについては、その近くに日本の拠点となる体育館のような施設があつてもいいのかなと思います。私たちは今回素晴らしい施設を用意してもらいましたが、複数の競技が一体化している方が「フェンシングが頑張っているからバドミントンも頑張ろう」と刺激になりますから。

でやってきたことをアレンジしていきましようという話は、積極的にしています。
平井 だから、畑違いの人を入れる必要性もあるんです。各競技を知っている人を入れることも大切ですが、全く関係ない新しい血も入れないと取り残されていきますよ。人間は経験が増えるに従って、客観性が薄れやすくなるもの。サポートスタッフは真つさらな目で見ているので、それを注入するのは大切なことだと思いますね。

価値のあつたサポートハウス

白井 ロンドンオリンピックでは新たな試みとしてマルチサポート・ハウスを設置しました。
平井 我々は主に大会前に利用しましたが、初参加の選手もだいぶリラックスできたようです。リカバリーのために高気圧カプセルを使つたり、ウエイトレトレーニングをやつた選手もいます。JISSの機能がそのまま移つていたのがよかったです。

江村 フェンシングは、特に女子はフル活用しました。対人競技はどう転ぶか分からないので、プラスになることは何でもしたいという思いがあつた。とにかく日本食を毎日食べたいし、交替浴(リカバリープール)を使つたり、リカバリーやケガのケアをしたりと非常に活用できました。

あそこへ行くと他種目のコーチもいて、いろんな話ができただけで、指導者もリラックスできましたね。

舛田 バドミントンは選手村から遠いところに競技会場があり、その近くに独自の練習拠点を置いてもらったので、移動時間が非常に長かった。昼からの練習でも10時間に出発する必要があつたので、リカバリー

平井 私は、サポートした内容をしっかりと残してほしいと思います。大雑把なことではなく、こういうアドバイスをしたからテクニクが変わったとか、もっと掘り下げた論文にして広げたいと思います。

今回は「チームワークがよかつたからメダルが獲れた」的な報道が多いですが、具体的に何をしたらかに関する報道が薄い。マルチサポートとJISSが連携して、スポーツ科学をもっと広められるようになれば現場にとってもプラスだと考えます。

江村 平井さんがおっしゃるように、誰が見ても分かる形に残してもらつて、次世代に伝える必要はありますね。競技別にサポート内容も違いますし、お互いに取り入れられるものもありますので、ぜひやってほしいです。

白井 今回の座談会は、お互いの情報交換という意味でも意義深かつたと思います。ありがとうございました。



平井伯昌氏(競泳日本代表ヘッドコーチ)